

第二節 自二十七年、八年 時代 至大正三年

明治二十七年英國ニ註文ノ我軍艦富士、八島ハ軍艦水雷兵裝上張目スベキ發達ヲ示セルモノニシテ

一、始メテ我國ニ水中發射管ヲ裝備セルコト

二、十八吋徑水雷發射管ヲ裝備セルコト

三、艦首水上發射管ヲ加ヘ五門ヲ裝備セルコト

四、前後司令塔指揮所ヲ設備セルコト

五、發射及通信裝置ニ於テ格段ノ進歩ヲ爲セルコト

等其ノ主要ナルモノナリ當時十八吋水中發射管ハ英國ニ於テモ尙其ノ確實性ニ對スル信賴度小ナリシ狀況ナリシガ我國ガ斷然之ヲ裝備セルハ列國海軍ノ驚愕セル所ナリ（既記魚雷兵器編參照）

之ヨリ先キ艦首發射管發射ハ種々ノ故障アリ特ニ艦型ノ増大ハ其ノ艦高ヲ大ナラシメタルノミナラズ速力ノ増進ハ之ガ適良ナル發射ヲ益々困難ナラシメタルト共ニ兵術上及造艦術上ヨリ云フモ艦首發射管ナルモノハ往時ノ遺物タルニ過ギザルノ說漸ク擡頭スルニ至リシガ三十一年四月之ガ廢止ニ關シ艦政當局ヨリノ左記仰裁ニ對シ認可ヲ與ヘタリ

從來甲鐵戰艦並ニ一等裝甲巡洋艦ニハ各水中發射管四門ヲ裝備シ尙ホ艦首ニ水上發射管一門ヲ備ヘ來リタルニ水上發射管ハ水中發

射管ニ比シ戰闘中危害ヲ被リ易キモノナレバ該發射管ノ兩側若クハ其ノ周圍ニ重量四十噸乃至六十噸ノ鋼板ヲ裝備シ以テ之ガ防禦ヲ施シ來リタリト雖未ダ完全ナル防禦トナスニ足ラズ依テ一朝該發射管室ニ敵彈ヲ被ルカ若クハ其ノ破片裝束シタル水雷ノ氣室ニ觸ルルガ如キコトアラバ氣室ハ直ニ猛烈ナル爆發ヲ爲シ遂ニ本艦ノ破壞ヲ招クニ至ルベシ艦首水上發射管ノ危險實ニ斯ノ如クナルヲ以テ實戰中之ヲ使用スルノ時機殆ド稀ナルモノト認ム故ニ用途稀ナル艦首水上發射管ニ對シ其ノ防禦用トシテ尠ナカラザル重量ト費用トヲ費サンヨリハ寧ロ之ヲ他ノ部分ニ轉用スル方遙カニ得策ナルモノトス抑モ各國競フテ水中發射管ヲ裝備シタル重ナル主意ハ上記ノ危害ヲ除去セムトスルニ外ナラズ英國ノ如キハ已ニ水中發射管ヲ裝備セル艦船ニハ自今水上發射管ヲ備ヘサルコトニ決セリト云フ我海軍ニ於テモ水中發射管ヲ裝備セル艦船ニアリテハ自今艦首水上發射管ヲ裝備セザルコトニ致度此段仰高裁候也(明治三十一年四月二十二日)

明治三十年前後ニ於ケル供用水雷兵器ノ一例別紙第一ノ如シ

水雷方位盤、夜中照準器及同電纜ハ三十一年頃ヨリ全般ニ普及シ嚴島等ニモ備付アリ水雷術半年報ニ依レバ半年間使用回数五回、使用時間五時間トアリ而シテ三十二年頃方位盤据付位置ニ關シテハ次ノ方針ニ據レリ

- 第一、方位盤ノ位置ハ何レノ角度ニ發射管ヲ旋回スルモ尙之ニ應ジテ充分ニ敵艦ヲ照準シ得ル位置ナラザルベカラズ
 - 第二、方位盤ハ可及的發射管直上ニ近ク且砲煙ノ遮蔽ヲ被ラザル位置ニ在ラザルベカラズ
- 三十二年先ニ米國ニ註文ノ千歲、笠置ノ兩艦ハ計畫ニ依ル艦首發射管不裝ノ儘着邦セシガ之レ亦此ノ種艦型ニ在リテモ艦首發射管ハ戰術上有効ナラザルノミナラズ直進器ノ採用ハ舷側發射管ヲ以テスルモ克ク艦首發射管ト同一發射ヲ爲サシメ得ルヲ理由トシ之ガ裝備ヲ止ム

同年六月艦艇魚雷定數ニ付左記ノ如ク規定(變更)セリ

艦艇竝ニ海防用魚雷發射管常用 二 戰時補給用 一 計三

即チ從來發射管一門四發宛ノ處艦艇ノ増加及直進器採用ノ結果魚雷ノ用法上新機軸ヲ發生シ小數ノ缺ヲ補ヒ得ベシト謂フニ在リ

又反裝水雷要具ノ格納及使用ハ從來小艦ニ於テハ頗ル難事ニ屬セシガ尙從來ノ經驗實習ニ鑑ミ之ガ價値ニ就テモ幾分怪訝ヲ挾マルルニ至リシ等ノ爲三十三年六月ヲ以テ七〇〇噸以下ノ艦船ニハ之ガ裝備ヲ廢止スルコトナレリ

明治三十四年三月二十二日山本海軍大臣ハ伊東海軍々令部長ヨリノ魚形水雷ニ關スル左記商議ニ對シ其ノ方法書中第一項魚形水雷員數ハ準備ノ都合上當分商議ニ應ジ難ク第二項及第三項ハ來意ノ通取計フベキ旨回答セリ

魚形水雷遠距離發射ノ儀從來數度ノ實驗ニ依リ最早採用致候テ可然ト存候就テハ此際至急各艦船ヘ別紙ノ方法ニ依リ同裝置竝ニ縱舵調整機ヲ供給シ同時ニ魚形水雷供給員數ヲ増額相成様致度此段及商議候也

三十四年二月二十二日

海軍軍令部長 子爵 伊 東 祐 亨

海軍大臣 山本權兵衛 殿

(別紙)

一、發射管一門ニ付魚形水雷ノ艦船搭載員數ヲ左ノ如ク増額シ供給水雷ハ總テ遠距離發射ノ試發ヲ爲シ其ノ調整ヲ爲シタル上近距

離發射裝置ノ儘供給シ遠距離發射ニ要スル裝置ハ各水雷毎ニ別ニ之ヲ供給ス但注油管ハ近距離ニモ遠距離ノモノヲ用フ

水雷艇	驅逐艦		軍艦		魚形水雷		遠距離裝置		縱舵調整機	
	「ソニーニークロフト型」	「ヤーロー型」	常用	補給用	常用	補給用	常用	補給用		
二	二	三	三	一	三	一	三	三	一	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
二	二	三	三	一	三	一	三	三	一	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
二	二	三	三	一	三	一	三	三	一	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	

二、遠距離裝置魚形水雷ヲ採用スル以上ハ其ノ採用ヲ秘密ニ附スル必要アルガ故ニ遠距離裝置魚形水雷ノ名稱ヲ左ノ如ク一般ニ呼稱セシムル様訓示スルコト

遠距離裝置魚形水雷ヲ 甲種魚形水雷

近距離裝置魚形水雷ヲ 乙種魚形水雷

三、甲種魚形水雷採用ノ節ハ右供給準備ト同時ニ甲種魚形水雷發射表（即チ甲種水雷調和器用彈子ヲ其ノ有効ノ限度内ニ於テ壓縮シ種々ノ強サニ對スル速力ト最大射距離ヲ示ス表）ノ調製ヲ各鎮守府ニ命ジ甲種水雷ノ供給ト同時ニ之ヲ各艦船ニ供給スルコト

四、新式保式水雷調和器上部ノ外皮ノ孔ヲ大ニシ甲乙兩種調和器用彈子ノ裝脫ヲ容易ナラシムルコト

三十五年艦型兵裝調查委員會（委員長有馬新一）ヲ開設セシガ同委員會水雷分科會ハ左ノ如ク議決セリ

艦船兵裝調查委員會決議中水雷ニ關スル事項

戰艦及一等巡洋艦ノ兵裝

水雷發射管 水中四門 水上一門

水中管四門ハ三笠ニ同シク水上管一門ハ艦尾ニ備フルモノス

理由

艦尾ニ水雷發射管ヲ裝置セシハ縱舵機ノ應用以來推進機ヨリ生ズル渦流ノ爲進路ヲ不定ナラシムルノ害ヲ除キ得ルト艦尾ヨリ發射スル水雷ハ事實上著ルシク射程ヲ延伸スルノ利アルト外國艦船中ニハ何レモ艦尾發射管ヲ有スルガ故ニ之等ト對戦スルニ當リ彼ハ我艦尾ニ接シテ安全ニ運動シ得ルニ係ハラズ我ハ彼ノ艦尾ヲ通過スルノ危險ナルノ不利アレバナリ

(參考)副砲ニ關スル理由書ノ一部抜萃

近來甲飯ノ製法著ルシク進歩シ艦ノ要部悉ク裝甲セラルルト共ニ魚形水雷ノ射程増進セシガ爲自ラ水雷射程外ニ於テ砲戰ヲ開始セラルベキヲ察シ副砲ノ口徑ヲ增大シ若クハ八尹、九、二尹等ノ中間砲ヲ加ヘントスルノ說アリシモ速射ノ最大効果ヲ收メ得ベキ六尹砲ノ多數ヲ搭載シ劇烈ナル破壊力ヲ加フルヲ有利ト認メ主砲ニ次グニ六尹砲ヲ以テスルコトニ決議セリ

明治三十六年五月第十八議會ノ協賛ヲ經タル第二期海軍擴張計畫ニ依リ製造スベキ艦船計畫要領書中戰艦兵裝ノ部發射管ニ關スルモノヲ要約セバ次ノ如シ蓋シ前記兵裝調査委員會ノ議決ニ遵據セルモノナリ

發射管 舷側水中管四門 艦尾水上管一門

艦尾ニ發射管ヲ増置セシハ「ジヤイロスコープ」ノ應用以來推進機ヨリ生ズル渦流ノ爲進路ヲ不定ナラシムルノ害ヲ除キ得ルト艦尾ヨリ發射スル水雷ハ著シク射程ヲ延伸シ得ルノ利アルヲ以テナリ露艦ハ何レモ艦尾管ヲ有スルモ從來ノ我戰艦ハ一モ之ヲ備フルモノナシ故ニ之ト對戦スルニ當リ彼ハ我艦尾ニ接シテ運動シ得ルニ拘ラズ我ハ彼ノ艦尾ヲ通過スルニ當リ水雷ノ危害ヲ顧慮セザルベカラザルノ不利アリ

艦ノ速力十六節、乙種水雷ノ射程八百米、速力三十節トセバ約千二百二十七米ノ危害區ヲ艦尾ニ存シ甲種水雷ノ射程三千米速力十五節トセバ約六千二百米(三倍以上)ノ危險區ヲ艦尾ニ存スル理由ナリ

水上裝置ハ敵彈ニ對シ危險ナリトノ非難モアラン然レドモ戰艦ノ艦尾保護甲板ノ末端ヨリ更ニ後方ニ突出セル部ニ裝スルガ故ニ若シ不幸ニシテ爆發スルコトアルモ艦ノ運轉力ニ危害ヲ與ヘザル裝置ヲ爲シ得ベキナリ

即チ明治三十六年英國ニ註文ノ香取鹿島ノ如キ三十七、八年戰役後ノ計畫ニ係ル薩摩級及河内級ノ如キ又同ジク前記決議ヲ尊重セル產物ナリト稱シ得ベシ

前記ノ如ク水雷兵裝ハ漸次完備シ其ノ主要兵器タル發射管ノ裝備方針等モ又樹立セラレシモ水中發射管發射電路ノ如キハ其ノ應急裝置ナク又前後部方位盤ヨリ直接後部發射管ヲ發射シ得ザルガ如キ或ハ未ダ縱舵調整器格納所ノ施設無キガ如キ前者ハ自艦ニテ假設セル發射電路ノ使用ニ依リ其要求ヲ充タセルモノアルモ後者ハ三十七、八年戰役直前若クハ戰役中漸ク格納所ヲ特設シ得タルガ如キ狀況ニアリキ

三十七、八年戰役ノ軍艦水雷兵裝及艦裝上ニ與ヘタル教訓ハ同戰役ニ於ケル魚雷使用機會ノ顯著ナラザリシガ爲大ナル收獲無カリシモ比較的細部ニ互ル具體的問題又尠ナカラズ其ノ主要ナルモノヲ記セバ左ノ如シ

一、方位盤据付位置ニ就テハ艦種ニ依リ稍主張ヲ異ニスルモ視界狹隘ニシテ展望自在ナラズ且艦長所在位置ト隔離スルガ如キハ一般ニ唱ヘラレシ缺點ニシテ之ヲ補ハンガ爲小司令塔ヲ前艦橋兩側又ハ兩舷側ニ設クルヲ適當トスルモノアリ

二、前記方位盤据付問題ト關聯シ通信裝置ニ關シ左記ノ必要ヲ認ム

(一) 前部司令塔ニ總發射管ニ對スル方位盤及之ニ要スル通信裝置ヲ完成シ水雷長自ラ之ニ就クコト

(二) 後部ニモ總發射管ニ對スル方位盤ヲ据付ケ之ニ要スル通信裝置ヲ備ヘ從屬將校又ハ他ノ擔任者之ニ就クコト

三、艦首發射管及水中發射管ノ利害得失ニ就テハ其ノ說區々ニシテ統一ヲ見ザルモ總テ之等發射管ヲ重要視スルモノ稀ナリ特ニ前者ニ就テ然リ

三十七、八年戰役後戰後經營ノ一端トシテ各種ノ調查會委員會等ヲ設ケ戰役ノ教訓ヲ收拾スルニ遺憾無カラシメタルガ之等中水雷兵裝艦裝ニ關係アルモノヲ舉グレバ三十九年六月戰利諸艦ノ發射管ニ關シ其ノ裝備方針ヲ決定シ三十九年九月新造艦型審査委員會(委員長片岡七郎)四十一年六月艦船搭載貯造品數量調査委員會(水雷分科主任伊地知彥次郎)等ニシテ夫々企劃實行スルトコロアリ同四十年十一月各艦種ニ互リ魚雷發射電路ヲ制定シ茲ニ始メテ從來ノ混亂不統一狀態ヲ匡救シ將來ニ對シ一定ノ基準ヲ確立シ得ルニ至レリ但之ガ實施ハ四十三年十一月之ガ換裝方ヲ訓令セシニ始マル又右ト相前後シテ四十一年艦艇裝方針調査委員會開設セラレシガ其ノ決議事項ハ本章ニ重要ナル關係アルヲ以テ附錄第一トシテ末尾ニ掲記セリ

之ヨリ先キ海軍教育本部長ハ魚雷兵器供用ノ現狀ニ鑑ミ四十年年度發射訓練報告所見ノ一部トシテ左記ヲ海軍大臣ニ提出シ之ガ更新ヲ求ムル所アリタリ

茲ニ本職ノ最モ遺憾トスルトコロノモノハ明治二十年頃製造ノ朱式水雷及二十六、七年頃製造ノ保式水雷ニシテ其ノ發射回數ノ如

キ幾百回ナルヲ知り難キ舊式水雷ガ今尙我海軍ニ於テ使用セザルベカラザル一事ナリ該水雷ノ全廢ニ就テハ明治三十八年度水雷發射報告ニ副ヘ一昨年巳ニ當時ノ教育本部長ヨリ意見提出シアルモ今ハ其ノ運ニ到ラザルガ此際更ニ審議ノ上之ガ廢止ヲ決行セラレムコト切望ニ堪ヘザルナリ

斯クテ四十二年ヨリ大正元年ニ亙リ更ニ次ノ各項ヲ實現シ兵裝艦裝上改善スル所アリタリ

一、舊式魚雷ノ取捨及同裝藥ノ選定(別紙第二)

二、嚴島、橋立等ノ發射管ヲ廢ス

三、浪速、千代田、須磨、明石、秋津洲等搭載ノ十四吋朱式發射管ヲ撤廢ス(朱式魚雷ハ大正二年三月全部廢品處分ニ附セラレタリ)

四、軍艦生駒ニ安式及吳式二十一吋水中發射管ヲ裝備シ比較實驗ヲ行ヘリ

五、二等巡洋艦ノ魚雷兵裝中艦尾發射管ノ價值ニ就キ兎角ノ論難アリ特ニ筑摩級ニ於テ振動甚シク縱舵機ヲ附スルモ其ノ成績信賴不能ナリトノ意見ニ基キ補強ヲ行フ

(參 考)

二等巡洋艦ノ魚雷兵裝意見(四十年四月
寺垣第二艦隊司令官)

本艦全速力ノ際ニハ如何ナル方法ヲ以テ艦尾水雷ヲ發射セラルルヤ又推進器ニ由テ生ズル渦浪ノ爲ト航跡ノ彎形ヲ爲セル場
合直進器ハ果シテ用ヲ爲スヤ否ヤ疑ガハシ戰術上ニ於テモ餘リ必要ヲ認メラレズ故ニ之ヲ除キ此重量ヲ以テ舵機室ノ防禦法
ヲ一層嚴重ナラシムル必要アリト認ム

又艦尾發射管ヲ除ケバ「ラダーポスト」ヲ艦尾端近クニ設置シ艦尾ヲ強固ナラシメ得ベシ

大正元年十月海軍教育本部長ハ更ニ海軍大臣ニ具申スルニ軍艦ニ裝備セル艦首發射管及露式發射管整

理ニ關スル件ヲ以テセシガ本意見ハ逐次實現セラルルニ至レリ(別紙第三)

之ヨリ先キ明治四十三年軍艦金剛ヲ英國ニ注文シ翌四十四年一月起工セシガ當時英國ハ已ニ二十一時魚雷ヲ採用シ我國亦之ガ試製實驗ヲ經シテ以テ金剛ノ魚雷兵裝ハ二十一時水中發射管ヲ採用シ且其ノ裝備方法ハ大體ニ於テ香取鹿島ニ倣ヒ艦尾一門ヲ加ヘ合計五門トナシ舷側發射管又香取級ト同ジク有角度式タラシムル計畫ナリシガ當時ノ駐英武官海軍中佐加藤寛治造兵監督官少佐油谷堅藏等ハ其兵裝ノ増大近代化ニ對シ大ニ當局ト交渉應酬スルトコロアリ遂ニ全部ヲ舷側正橫裝備式ト爲シ而カモ片舷四門合計八門ニ増大シ魚雷兵裝ニ一大躍進ヲ爲サシメ列強ノ耳目ヲ聳動セルハ既述富士、八島建造當時ノ事情ト共ニ水雷界ノ一大快事タルヲ失ハズ

此ノ間特記スベキハ明治四十三年海軍中佐桑島省三ハ其ノ著魚雷射法及發射法ニ於テ水雷兵裝及發射指揮通信裝置ニ關スル所懷ヲ披瀝シ之等整備ノ急ト所要具體案ヲ說述スルトコロアリ斯界ニ對シ一大警鐘ヲ與ヒ前記金剛水雷兵裝ノ如キモ此種主張ニ刺戟セラレタル所尠ナカラザルモノニシテ蓋シ當時ニ於ケル魚雷發達ノ趨勢即チ冷走動力ガ加熱トナリ次デ加熱噴水トナリ十八吋徑魚雷ガ二十一時徑魚雷ニ進化スル等四圍ノ雰圍氣ノ齎ラセル必至ノ所產トモ認メ得ザルニアラズ

曩ニ明治四十一年發射電路制式ヲ制定スルトコロアリシガ發射指揮通信裝置ニ就テハ未ダ制式ヲ見ルニ至ラズ差當リ各種通信器ノ利害ヲ比較スル必要ヲ認メ大正二年軍艦朝日ニ指表式通信器ヲ裝備シ翌

三年一月從來ノ諸通信器トノ比較實驗ヲ行ヘリ要領左ノ如シ

軍艦朝日新設魚雷發射指揮通信裝置實驗要領

- 一、軍艦朝日ニ於テ艦砲射擊中齊發又ハ獨立發射ニ於テ今回新設ノ指揮通信器ト高聲電話並ニ傳聲管トノ實地通信比較試驗但朝日後部發射管ハ後方ニ角度ヲ有スル斜進器ヲ以テ前部發射管ト齊射ヲ爲シ得ルモノト假定ス
- 二、第一項實驗ノ結果ヨリ推究シ六乃至八門ノ舷側水中發射管ヲ有スル艦ニ於テ高聲電話並ニ傳聲管ニ比シ本通信器ノ價值
- 三、本通信器ハ移動用トシテ重量容積共ニ大ナルニ於テハ二個ヲ別々トナシ各舷側ニ常置スル以外輕便簡易ナル器ノ改造意見
- 四、以上ノ外器具ノ増設及改良ニ關スル意見

而シテ軍艦金剛ノ建造ニ當リ各種新式指揮通信器具ヲ英國ヨリ購入裝備シ本裝置ノ改善制定ニ貢獻セル所尠ナカラズ之ヲ三十九年着邦ノ香取ニ比スルニ相當顯著ナル進境ヲ認め得タリ

大正二年四月新舊魚雷ノ供給方針ニ付左ノ如ク定メタリ

- 三八式二號及四二式ハ驅逐艦、水雷艇、潜水艇及艦載水雷艇ニ四三式ハ大正元年末ヨリ三年度ニ亘リ左記順序(略)ニ軍艦及一、二等驅逐艦ニ四四式ハ大正二年末ヨリ三、四年度ニ於テ香取以後ノ戰艦及巡洋戰艦ニ次テ平戶級及一等驅逐艦ニ供給ス
- 三四式(海防)ハ一小部ヲ殘シ(特設船舶及伊勢山崎用)他ハ適時迄保存シ修理ヲ行ハズ由良射傑用ニハ三六式一號ヲ用フ

先ニ四十五年七月(官房機密 第四四八號)各艇魚雷準備額ヲ定メシガ更ニ大正三年二月本準備額ヲ左ノ通改正セリ

發射機別	準備數表		常用數				補給數					
	數	稱	二十一吋	十八吋	十五吋 <small>(露)</small>	十四吋	三四式十八吋	二十一吋	十八吋	十五吋 <small>(露)</small>	十四吋	三四式十八吋
發射管	一門ニ付	二	二	二	二	二	三	三	三	三		

別紙第一

明治三十年前後艦團部隊供用水雷兵器ノ一例

一、横須賀水雷團水雷敷設隊(訓練用)

- 一、水雷罐
- 海底水雷罐 七 浮漂水雷罐 七 電気觸發水雷罐 一四 電気機械水雷罐 五
- 二、電路啓閉器
- 「シルヴァタウン」式 一四
- 三、敷設水雷附屬諸器具(數量略ス)
- 電気觸發水雷用電路啓閉器械、安氏電驛器附電路啓閉器械、電気機械水雷用水銀電路啓閉器械、一、二、三號錘量、底片、導火藥罐、倍心電纜接合函、導火藥罐包筒、丁字形接續函、鐵鏈、斷電路子、安氏電驛器、單心電纜接合函
- 四、電池、電纜、電氣的計量器、以下(略)

艦時特設船舶用落射機	一組ニ付	二				二			
軌道式落射機	同				一				一
走線式落射機	一條ニ付		一					一	
艦載水雷艇用落射機	一組ニ付		二				三		
								四	
									三

五、電池

海軍用電池、端舟電池、信號用電池、單綫線電流計

六、電纜

七心裝鍍電纜、四心裝鍍電纜、單心裝鍍電纜、小裝鍍電纜

七、電氣的計量器

威氏電橋、三纏線電流計、燒灼抵抗縮線器、精針電流計、正切電流計、單綫線電流計、試驗電池、試驗纏線器

八、爆發物

海軍爆發信管、斷電路信管

二、軍艦富士供用水雷兵器（三十二年三月
主要ノモノノミ）

一、反裝水雷及屬具

反裝水雷電路用尋常接續函、四號鐘量、安式電驛器、視發弧器、信號用及發火用啓絡器

（註）反裝水雷罐ハ未搭載

二、電池

距離通報器用電池、回轉指示計用電池、發射管局所電池、電鐘用電池、其ノ他

三、電纜

陸用電信線（探海、掃海）、其ノ他

四、電氣的計量器

威氏電橋、精針電流計、燒灼抵抗縮線器、感動縮線、受聽器

五、爆發物

濕綿火藥、導火藥罐、小形爆發藥附探海錨用藥罐、大型爆發藥附探海錨用藥罐、大形鈎附試力罐、魚雷發射火藥、同用電氣火管、

海中爆發信管、十五號爆發信管、魚雷爆發尖用導火子、實用頭部、魚雷用爆發信管

六、魚形水雷

保式十八吋長、同短

七、發射管

安式水上發射管、安式水中發射管、發射機(艦載水雷艇用)

八、網

「フリバンド」式

別紙第二

舊式魚雷ノ取捨及同裝藥ノ選定

吾海軍ニ現存スル保式水雷中ニハ魚形水雷ノ進歩著ルシキ今日已ニ戰闘用トシテ効力微弱ナルモノ少ナカラズ之等ハ結構衝突頭部發射ニノミ使用スベキモノナルヲ以テ其ノ實用頭部ヲ空虛ノ儘トシ左記ノ比較的優良ナルモノニ限り至急下瀨火藥ニ換裝スルコトトシ此際濕縮火藥ノ處分整理ト相俟ツテ全部魚雷用濕縮火藥ノ使用ヲ廢シ其ノ不良ナルモノハ棄却シ良好ナルモノハ建築科所掌ノ工事ニ使用スルカ或ハ賣却處分ニ付スルコトトス

(記) 三〇式十四吋 一七一 三二式十四吋 四〇 三四式十八吋 一五五

三七式十八吋 七 露式十五吋 一〇

(註) 下瀨火藥ヲ換裝セズ空虛ノ儘差置クモノ

二六式十四吋 九五 三〇式十八吋 六七 三二式十八吋 四三

別紙第三

大正元年十月十一日

海軍教育本部長

坂

本

俊

篤

海軍大臣 加藤 友三郎 殿

軍艦ニ裝備セル艦首發射管及露式發射管ノ整理ニ關スル件

一、艦首發射管ヲ撤廢スルカ若ハ其ノ使用ヲ停止スルコト

現在艦首發射管ヲ有スル軍艦ハ數島、富士、淺間、常磐、吾妻、八雲ノ六艦ナレドモ之等諸艦ガ實戰上艦首發射管ヲ使用スルノ時機無カルベキハ殆ド疑フノ餘地無ク嘗テ之ヲ有セル軍艦ニシテ已ニ撤去セラレタルモノアルニ徴スルモ之ヲ整理スルノ必要ハ已定ノ事實ナルベキヲ認メザルヲ得ズ或ハ現ニ之ヲ裝備シアルモノヲ特ニ撤去スルノ必要ヲ認メズトノ議モアルベケレドモ此ノ如キ實戰ニ使用ノ望ナキ兵器ヲ存置スルハ取扱者ヲシテ其ノ効力ニ對シ疑悞ノ念ヲ抱カシメ教育上望マシカラザル現象ヲ呈スルヲ以テ寧口之ヲ撤廢スルカ若クハ其ノ使用ヲ停止シ其ノ魚雷及人員等ヲ他ニ利用セラレンコト至當ノ處置ナルベキヲ信ズ

二、露式發射管ヲ撤廢スルカ若クハ其ノ使用ヲ停止シ必要ナル軍艦ハ逐次ニ安式發射管ヲ換裝スルコト

現在露式發射管ヲ有スル軍艦ハ周訪、石見、阿蘇、鈴谷(相模ハ現ニ使用ヲ停止シアリ)ノ四艦ナレドモ露式魚雷ハ今ヤ舊式ニ屬シ駛走距離著シク短小ナルノミナラズ不具合ノ爲屢々沈没等ノ故障アリ實戰ニ到底使用ノ望無キヲ以テ寧口之ヲ撤廢スルカ若クハ其ノ使用ヲ停止シ之ニ要スル人員等ヲ他ニ利用シ必要ナル軍艦ニ對シテノミ逐次ニ安式發射管ヲ換裝セシムルコト至當ノ處置ナルベキヲ信ズ

右意見提出ス